

覇者の戦塵1945

硫黄島航空戦線

谷 甲州

Koshu Tani

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

挿画 佐藤道明

地図 らいとすたつふ

覇者の戦塵 1945

硫黄島航空戦線

目次

序章 昭和二〇年一月

第一章 東シナ海

第二章 南京から欧州へ

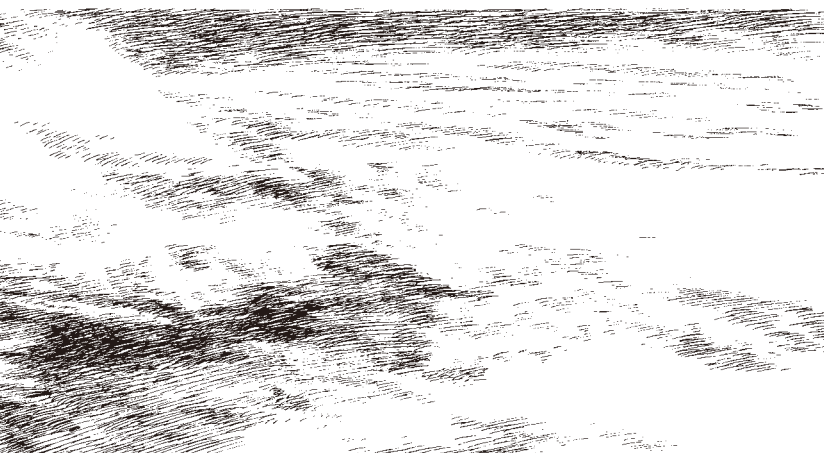
第三章 夜間戦闘飛行隊

84

46

20

10



第四章
ブラックウイドウ
黒衣の未亡人殺し

115

第五章
勝利条件

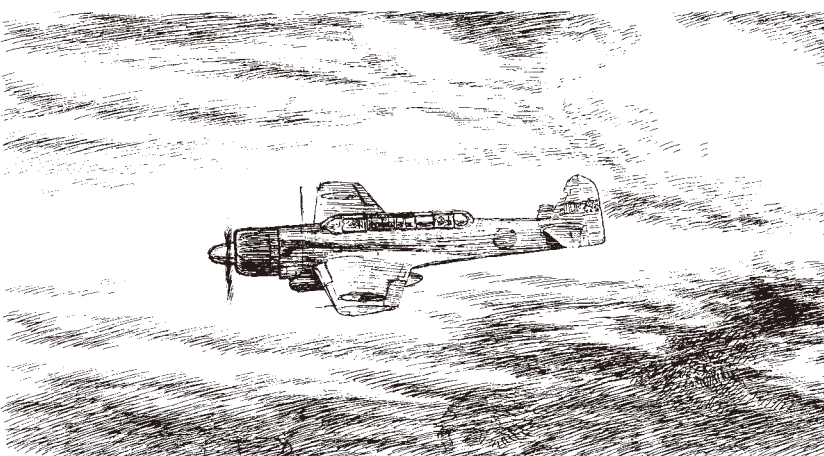
158

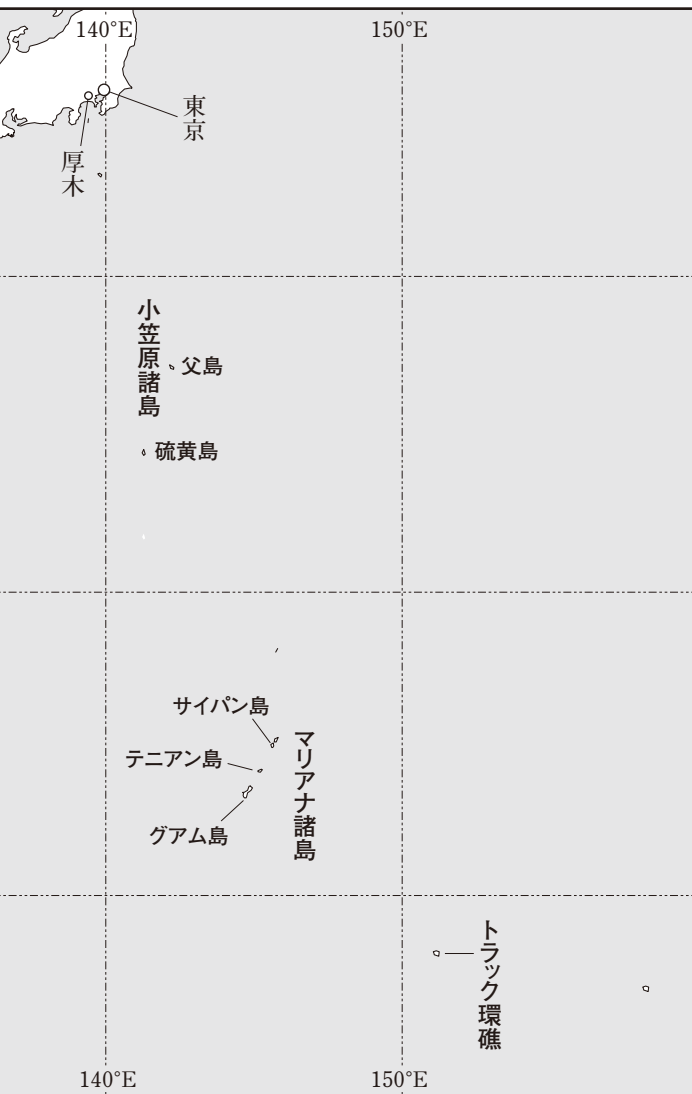
終章
難題

200

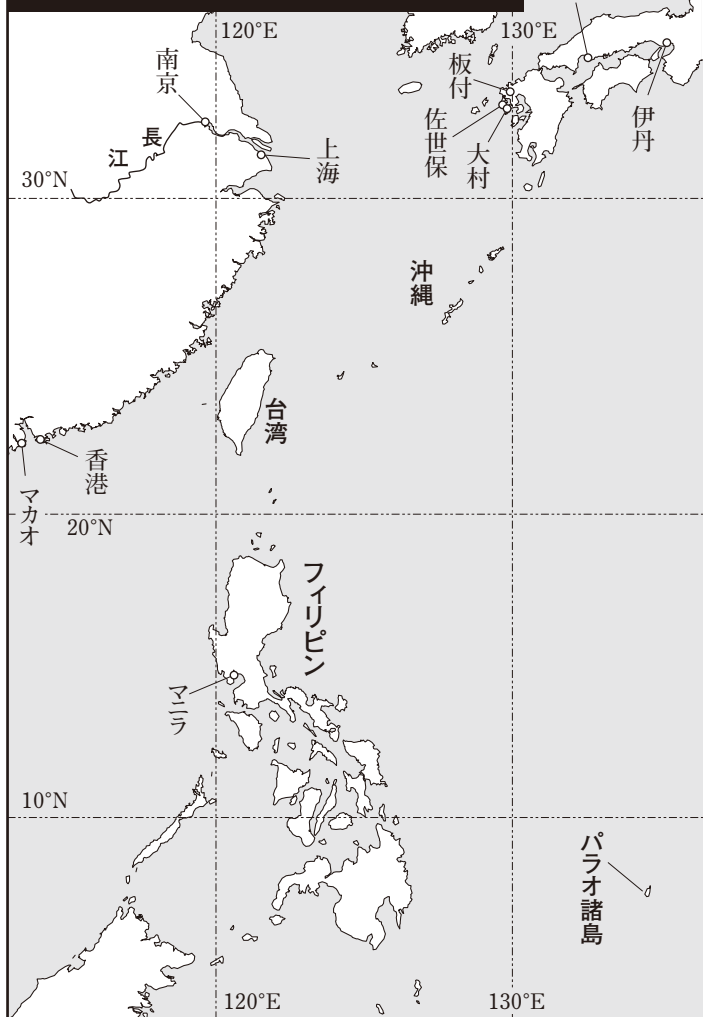
あとがき

211

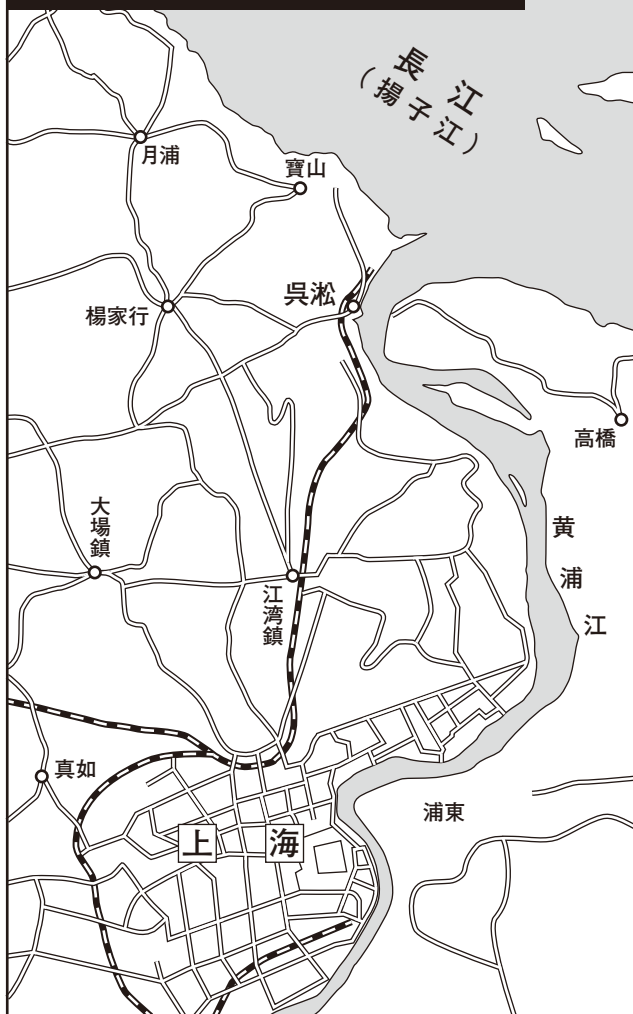




北西部太平洋要図



上海・吳淞周辺図



覇者の戦塵 1945

硫黄島航空戦線

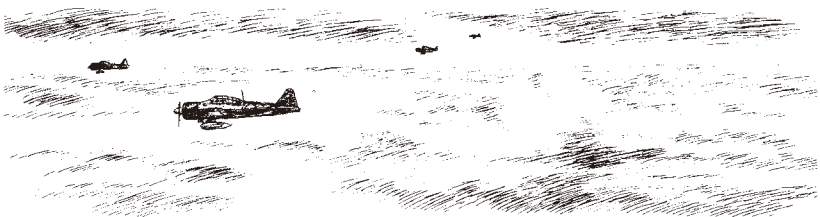
序章 昭和二〇年一月

かすかな殺気を感じて、常念寺二飛曹はふり返った。

そこに誰もいないことは、最初からわかっていた。それでも確かめずには、いられなかった。滑稽な姿だと、自分でも思った。しかし、無視はできない。そして予想どおり殺気は消えていた。すべてを呑みこむかのような深い闇が、視野の端まで広がっている。

正体不明の何ものかは、闇の奥に退いたらしい。周囲は爆音で満たされている。十数機もの戦闘機群が、試運転を開始していた。殺気どころか、普通の話し声も聞きとれない。耳元で怒鳴っても、意図が伝わらないのだ。

これでは背後に何かがひそんでいても、気づかないだろう。その事実^{じじつ}に常念寺二飛曹は、ぞっとするものを感じた。温暖な気候なの



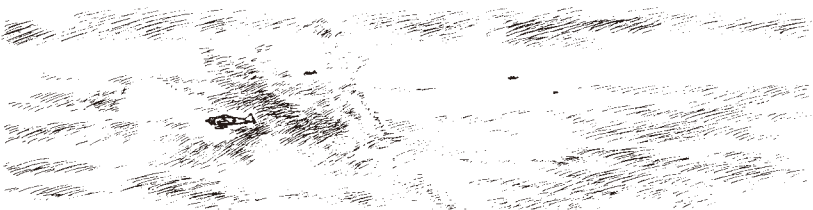
に、肌寒さで体の芯が冷え冷えとしている。それでようやく、気がついた。殺氣の主は、死神ではないのか。

暗い夜だった。先ほどまでは断雲の狭間から、星空が垣間みえた。全天を圧するほどではないが、闇にひそむ異形のものたちから居場所を奪うほどの光量があった。それがいつの間にか雲が流れて、星々を隠している。

そのことに常念寺二飛曹は、漠然とした不安を感じた。予想外の損害をだして、作戦は失敗に終わるのではないか。最悪の場合は攻撃目標を発見できず、機位を失って全機が未帰還ということもありうる。

同様の事態は以前にも経験していた。マリアナ諸島をめぐる航空戦だった。敵と味方の戦闘機群が入り乱れた大規模な航空戦が発生した。そのとき乱戦から抜けだした敵戦闘機が、常念寺機の後方にもぐり込んだのだ。

一瞬の間をついた果敢な攻撃だった。その結果、常念寺機は動きを封じられた。無闇に悪あがきをしても、窮地から抜けだせるとは



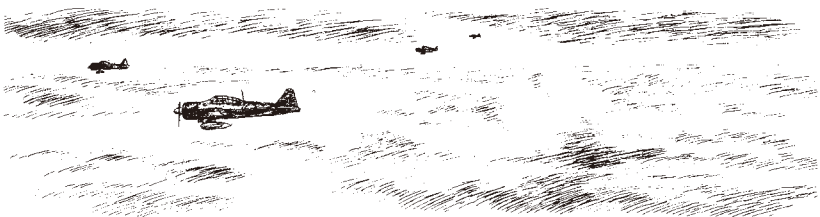
思えない。それがわかっていたから、成りゆきにまかせるしかなかった。ただ、その後の記憶は曖昧だった。

多数の弾痕が愛機に残っていたものの、常念寺二飛曹は生還した。ということとは、からくも死地を脱したことになる。ただし運には見放された。敵と戦って負け知らずなのではない。あれから何度も出撃しているのに、実戦には参入できなかったのだ。

覚悟して出撃したのに敵機と遭遇しなかったり、機体の不具合で部隊主力から脱落して引き返すという事態があいついだ。それと前後して、勘が異様に鋭くなったような気がする。わずかな兆候から、強大な敵の存在を「感じ」とつてしまうのだ。

今回もそうだった。殺気ばかりではなかった。途方もない危険の存在は、作戦の概要を知らされたときから感じていた。硫黄島いおうとうに進出してからは、尋常ではない「兆候」があらわれていた。だが、それを口にすることはできない。

海軍第三〇二航空隊から分派された攻撃隊は、夜間飛行が可能な搭乗員を中核に編成された。主力は落下増槽のみを装備した零式艦



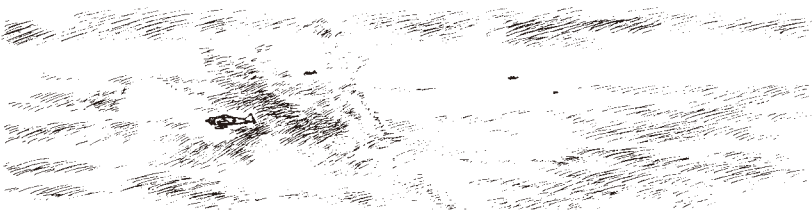
上戦闘機だった。中堅搭乗員の常念寺二飛曹も、当初から搭乗割に組みこまれていた。

発端は現地諜者からの情報だった。日本軍が組織的な戦闘を終了したあとも現地に残留して遊撃戦を展開する一方、後方兵站へいたんに関する重要情報を送ってくる。潜水艦や偵察機さらには通信傍受など情報源は増大したが、探るべき真実はひとつだけだ。

断片的な情報をもとに、マリアナ諸島に対する襲撃計画が練られた。米軍の占領下にある二島——グアムおよびテニアンでは、大規模な作戦計画の動きがあるという。複数の情報源が、そのことを裏づけていた。ところが作戦開始の日付がわからない。

それでも狙われているのは、本土の重要施設——おそらく航空機工場ということがわかった。これまでの経緯からして、爆撃する時間帯は昼間であるはずだ。それならマリアナ諸島の出撃時を狙って襲撃すれば、撃ちもらすことはない。

出撃を間近にひかえたB 29は、燃料や弾薬を満載している。一発の機銃弾が命中するだけで、炎上するほど脆弱ぜいじやくな状態だった。そ



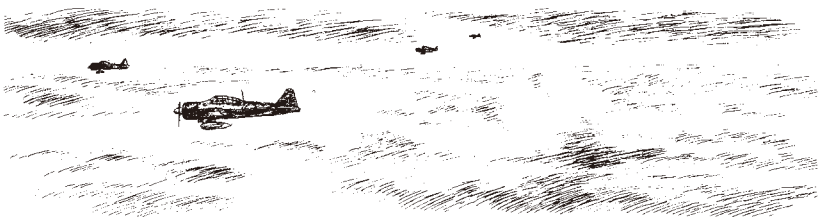
んな状態で、慣れない夜間の離陸を強行するとは思えない。新型機に特有の初期不良も多いから、発進は明るくなってからと思われる。

不確定な要素は多いものの、零式艦戦の掃射だけで米軍基地全体が炎上するのではないか。作戦の決行日は最後まで不明だったが、それは大きな問題ではない。空振りなら、やり直せばいいのだ。条件がととのうまで、何日でも硫黄島に腰をすえるべきだった。

勢いこんで、零式艦戦隊は厚木を発進した。一日めの夕暮れまでには、予定どおり全機が硫黄島に到着した——かにみえた。ところが着陸する段階で、若年搭乗員ジャックの機体が不安定に揺れた。蓄積した疲労が限界に達していたらしい。

あつと思つたときには、機体は横転していた。そこに常念寺二飛曹機と、後続の菅谷飛長機すがたにがあいついで突っつけた。さいわい重傷は負わなかったが、あわせて三機がお釈迦しゃかになった。

常念寺二飛曹としては、無念この上ない状況だった。今度こそはと意気込んだのに、またもや戦列から脱落することになった。しかも今回は、攻撃隊全体が窮地に追いこまれそうな予感がする。それ



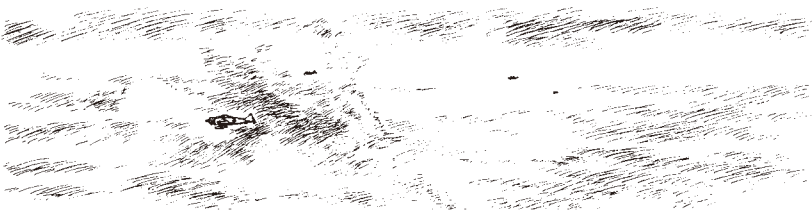
なのに、何もできなかった。

できることなら代替機を調達して、攻撃に加わりたかった。だが硫黄島には、余分な機体など一機も残っていない。使用可能な機体は空襲を避けて、隊ごと父島^{ちちじま}に移駐していた。三人の搭乗員だけが宙に浮いた格好になったが、攻撃の終了まで待つしかない。

ところが攻撃隊の不運は、それで終わらなかった。一七機だけになった攻撃隊は夜半すぎに出撃を試みたが、離陸の間際になって先行した気象偵察機から情報電が着信した。現地は密雲が低くたれ込めて視界が不良、攻撃を強行しても戦果は期待できないという。

待つしかなかった。ところが予想に反して天候は回復せず、中途半端な状態のまま硫黄島に長居をしいられた。これは危険きわまりない状況だった。予定では日没から夜半すぎまでの数時間程度を、硫黄島中央台地の飛行場周辺で待機するだけでよかった。

ところが足留め状態が長引くにつれて、次第に危険の存在が無視できなくなってきた。たとえ対空偽装を施していても、待機中の攻撃隊が発見される可能性は高い。マリアナ諸島からは、連日のよう



に偵察機が飛来している。

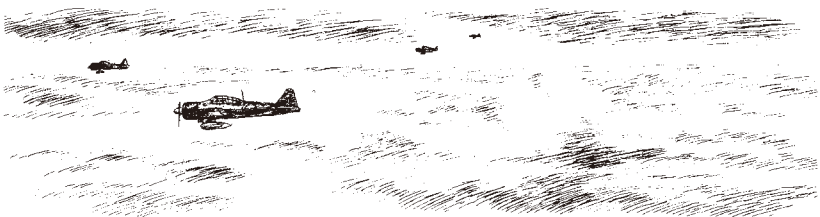
機銃だけの零式艦戦でも、離陸時のB29にはかなりの脅威となる。少なくとも出撃時刻の変更程度は、対策を立てるだろう。積極的な指揮官なら、先手を打って硫黄島を空襲するかもしれない。大部隊で銃爆撃すれば、零式艦戦の地上撃破も可能だった。

身動きがとれないまま、時間が無意味に過ぎていった。そして攻撃隊に、あらたな問題が浮上した。出撃が延期と決まった時点でエンジン点を点検したところ、二機に深刻な不具合がみつかったのだ。

整備態勢が不十分なまま、旧型機で無理な長距離飛行をしたせいだ。

特殊な工具か交換部品が必要だが、同行した整備班は最低限の工具しか持ちこまなかった。必要なものだけを輸送機に積みこんで、硫黄島で本隊と合流したのだ。部品の予備など、最初からなかった。父島の海兵隊に事情を話して、融通してもらうしかない。

海兵隊の主力機は零式艦上戦闘機を改造した一式戦闘爆撃機だから、主要な部品には互換性がある。このとき待機は、かなり長引きそうな見通しだった。整備員用の輸送機はただちに離陸し、父島を



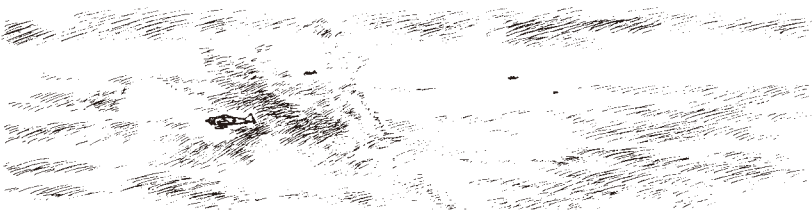
經由して厚木にむかうことになった。

もし父島で部品が入手できても、硫黄島に引き返すとは限らない。米軍戦闘機が出没する海域だから、危険と判断したら無理はしないよう指示されていた。当地の守備隊に部品を託して、内地に引き返すことになるはずだ。

ところが輸送機からは、その後なんの連絡もなかった。搭乗員は単独飛行も可能な中堅どころだから、航法を誤って遭難したとは思えない。逆探知を回避するために無線連絡を断っているとしても、もうすぐ燃料がつきる時刻だった。

結局、消息がわからないまま日が暮れた。あいかわらず連絡はなく、情報も入ってこない。常念寺二飛曹にとっては、居心地の悪い時間帯だった。移動中に機を失った搭乗員のうち、三人が硫黄島を去っていた。

ところが常念寺二飛曹と菅谷飛長だけは、島に残留した。故障機の修理終了を見込んだらしいが、島流しにされたかのように落ちつかない。稼働機の減少は常念寺二飛曹の責任ではないのだが、これ



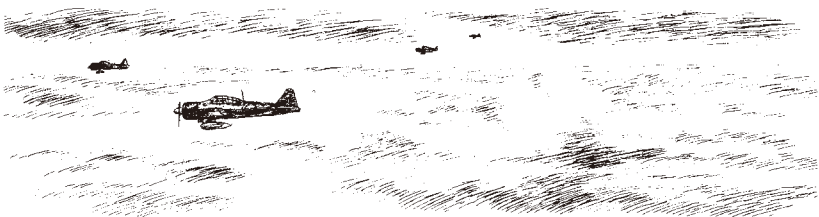
までの経緯から不運を呼びこんだような気がするのだ。

陰惨な気分から抜けだせないまま、着陸して二日めが暮れた。状況が急転したのは、夜半すぎだった。軍司令部からの情報電が、転送されてきたらしい。グアムおよびテニアン両島の米軍航空隊基地に、出撃の動きがあるというのだ。

一五機だけになった攻撃隊も、ただちに出撃の準備を開始した。陰鬱だった搭乗員たちの表情が、別人のように明るくなっている。劣悪な生活環境の中を、先行きが不透明な状態で耐えぬいた。それだけで、低下した士気を回復できた。

無論この島の守備隊員は、誰よりも長期にわたって苦難に耐えた。地の底から際限なく噴出する高压の硫黄ガスと地熱に耐えながら、敵の来襲にそなえていた。それだけに、零式艦戦隊の出撃をわがことのように喜んでいた。

時間がすぎるにしたがつて、少しずつ情報の確度が上がっていった。最初のうちは出撃にそなえて、準備だけはしておく程度だった。それがすぐに、確実さをましていった。定められた運用手順にした

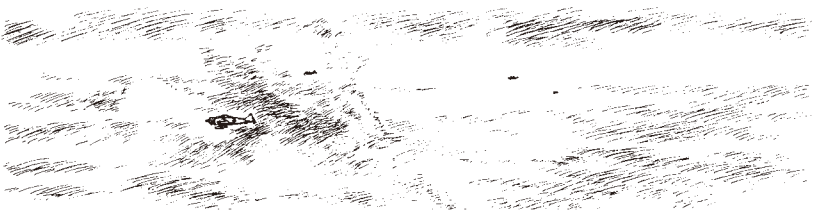


がつて、次々に作業がこなされていく。

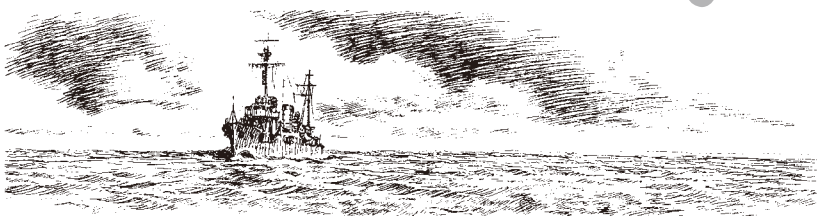
最初に離陸したのは、艦上偵察機「彩雲改」^{さいうんかい}だった。滑走路先端の淡い誘導灯を目印に、三機が間をおいて加速を開始した。攻撃目標の先行偵察や単座機の航法教導、さらに戦果の確認などを担当する。

常念寺二飛曹が異様な感覚に気づいたのは、このときだった、何か途方もなく大きなものが、発進準備を終えた零式艦戦に急接近してくる——そんな印象を受けた。それなのに、警告の声をあげる事ができない。何をするのも、遅すぎた。

すでに零式艦戦の一番機は、待機位置を離れて滑走路に乗りだそうとしている。声をあげた程度では、意図が伝わるとは思えなかった。離陸を中止させるには、機体の前に身を投げだすしかない。命を捨てる覚悟がなければ、攻撃の中止など思いもよらなかった。



第一章 東シナ海



1

事態は悪化する一方だった。

あらたな情報が入るたびに、秋津大佐は表情をくもらせた。予想はことごとく外れ、時間がすぎても打開の糸口がつかめなかった。それほど楽観的だったわけではない。ただ駆逐艦「夕風」の艦長にだけ打ちあけた計画の概要は、甘すぎた気がする。

慎重に言葉を選びぬいた上で、秋津大佐は話した。艦長の淡路中佐は、秋津大佐の意図を十分に察したようだ。一字一句も聞きのがすことのないように、じっと耳を傾けている。それを確かめて、大佐は計画の最終段階を告げた。

「状況によっては『隣国の政府要人』あるいは

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。